

『経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践』 臨床現場のケア改善に 寄与する教育書

著：安酸史子／定価：本体 3,200 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



安酸史子氏がなぜ、経験型実習教育に関心を向けたのか。それは氏の学びの経歴に関係する。氏は専門学校を卒業後に臨床を経験し、千葉大学看護学部で1学年から入り直している。同級生と一緒に実習するなかで、「看護師や教員が叱りつけるような出来事でも、必ず学生なりの理由がある。そのことを言えない学生も多くいた」(p. v)ことを、臨床をふまえ、改めて一人の看護学生の立場で学んだのである。学生時代にこうした“学び”への関心が芽生えていたのだ。

そうした思いから、長きにわたる教員生活の結実といえるこの書籍は以下の一文にその哲学が示されている。「経験型実習教育においては、学習者を成人と捉え(成人教育学)、教育内容はヒューマンケアリングを志向し、関わりの方論としてはケアリング及び自己効力理論を基盤にしている。経験型実習教育では、教師は学生が豊かな直接的経験ができるように学習環境を整え、反省的経験の過程が促進されるような学習の場を準備し、学生による探求が進むように援助する。この経験の捉え方はデューイの考え方をもとにしている」(p.52)。

安酸氏は経験型実習教育を、指導型の実習教育と対比して説明している。指導型が「教師の価値観を看護の初学者の学生に学ばせる」ことに対して、経験型は「経験の意味づけによる学生の看護

観の形成を援助する」ことを焦点にしている。

経験型実習教育はこうすべきという行動形成ではなく、学生と対話し、学生の経験を大切にしておかかわるのである。すなわち、学生の経験を中心に実習教育が展開している。

具体的には、学生の困っていること、気になっていることをよく聴き、受け止める。学生の強みを見つける。どのような行動をしたら状態が改善すると思っているかを聞き、今後どのような状況になるかの認識を高め、どのような行動をとればよい結果をもたらすのかという期待を高める(pp. 53-56)。しかし、急性期の人々が入院している現場では、現場の状況に教員も飲み込まれ、学生の話をつつくりと聴くより、現場に迷惑にならないように、そして実習の場を今後も継続して提供してもらえるように行動せざるを得ないというジレンマがある。このような状況も理解しつつ安酸氏は、実習教育では学生の経験に目を向けることの重要性を唱えているのである。

本書は理論、理論の展開、評価、研修、事例、有効性の検証と6部から構成されており、どのように経験型実習教育を展開すればよいかわかりやすい。この著書は、まさに氏の経験の賜物として、安酸氏の強い思いを感じる。この経験型実習教育により、現場がよりよいケアリングの環境になることを期待している。